

## 研修報告 E班2グループ 私たちの私情協

### 1. はじめに

本研修では、「参加者が ICT 活用の可能性や工夫について基礎的な理解を深め、大学の管理運営や教育活動の充実に向けて主体的に取り組む考察力の獲得を目指す」とその目的が設定されている通り、テーマの選定から各グループに委ねられた。私たちE班2グループは発表テーマを「学生の“前に踏み出す力”を育成する」と定め、討議を重ねた。ここに、グループ内で議論された内容について報告する。

### 2. テーマ選定理由

#### ・私たちが考えた大学の役割（大学を取り巻く環境、社会が大学に求めること）

私たちはまず大学の役割について様々な意見を出し合い、そこからテーマ設定を行おうと考えた。議論を行った結果、大学の役割は社会からの要請に応え、「学生支援」「情報公開」「研究」を行うことであると確認され、私たちのグループでは「教育と研究を提供することで社会の発展に寄与すること」が大学の使命であると結論づけた。

#### ・役割を果たすために、大学は何をしなければいけないのか

大学の役割のなかでも特に重視しなければならないことは、やはり「学生支援」だろう。しかし現状はどうなのか？そのことについて各自で意見を出し合った。

#### ・大学の現状はどうだろうか（目指すところと現状の差）

現在、大学に入学する学生の「目的意識の多様化」が目立つという意見が多く挙げられた。学生を仮にピラミッドの形で表すと、学業・課外活動に積極的な僅かなトップ層・良くも悪くも平凡な中間層・全てにおいて消極的で学校にも来なくなる底辺層に別れるという意見で一致した。

#### ・実現するためにはどのような取り組みが必要なのだろうか

大学の役割を果たすためには学生全体の底上げを目指し、その中でも特に、大学に来る目的を失った学生（底辺層）のピラミッドへの組み込みを促すことが必要だと考えた。

#### ・大学の役割、大学の現状を踏まえて、何が重要と考えたのか

以上のことから私たちは、大学の役割は社会の発展に寄与することであり、社会で生きていける人材を輩出することだと考えた。そのためには、学生にやる気と自信をつけさせることが重要である。学生に自信を付けさせることが出来れば、必然的に学生の“前に踏み出す力”も引き出すことが出来るという結論に至った。

### 3. 問題点と解決策の検討

#### ・問題点の整理

次に私たちは、これらの学生（底辺層）が直面している問題について話し合った。彼らは「リアルな友達ができない」「授業や大学のシステムについていけない」「教職

員と合わない」「部活やサークルなどに所属せず、楽しみがない」などの問題を抱えており、総じて「大学へ行っても楽しくない」「大学へ行く理由を失っている」との指摘がなされた。

#### ・解決策の検討

これらの問題を解決するためには、①彼らに居場所を与え、②そこを訪れるきっかけを与えることが必要だと考えた。具体的には以下のような案が挙がった。

ハード面（居場所づくり）	ソフト面（きっかけづくり）
・学生が自由にコミュニケーションをとり学習できるスペースを増やす	・新入生が先輩や教職員と関われる交流パーティーを開く(大学全体行事として)
・学生がどんな悩みでも相談できる(学生生活を支援する)場をつくる	・新入生の出身地別交流会を開く
・24 時間学生がいつでも来て勉強・研究ができる場をつくる	・ピアサポート(学生が学生を支援する)体制を整備する

#### 4. 大学イノベーションの提案

私たちは、問題点・解決策の検討結果を踏まえ、「学生が自由に学習できるスペースを提供し、勉強や学生生活について気軽に相談できる体制をつくる」ことを提案した。

具体的には、まず、自由に飲食や会話、PC が利用できる学習スペースなどハード面での環境を整備する。時間のある上回生や教職員が滞在し、勉強や学生生活について相談を受け付ける人的支援体制を整え、場の提供をする。その場を訪れるきっかけとしては、新入生が先輩や教職員と関われる交流パーティーを開き、情報を提供することで興味を持ってもらう。相談に訪れた学生には居場所を提供し、ゆくゆくは相談を受け付けるスタッフ、運営側の立場になってもらい、体制を担ってもらうことを展望する。

以上のような体制を整えることで、学生がまず居場所を見つけ、そこでの活動に取り組むことで、結果として勉強や将来への一步を踏み出すことができ、ひいては実社会で生きていける人となることを効果として期待できると考えた。

#### 5. 最後に

発表を終えて、参加者や運営委員の方から「器（場所）を提供すれば問題は解決するのか。」「このような取り組みは既に様々な大学で行われているのではないか。」といったご意見をいただいた。私たちとしては、場所を提供するだけでなく、そこを訪れる“きっかけ作り”で在校生や教職員をも巻き込んだ大学全体としての有機的な働きかけを企図していたのだが、その点について十分説得性を持たせられるよう、まだ考えを深める必要があると感じた。また、「そもそも授業が面白ければ学生は大学に来るのではないか」とのご意見もいただいた。これは私たちのグループ討議の中では議論にあがらなかった点であり、多角的な視野から大学教育を捉え議論することの重要性を感じた。